

課題名：漆器業関連文化遺産の研究と漆室の3D技術活用に関する取り組み

研究代表者：盛岡短期大学部 准教授 三須田善暢

課題提案者：八幡平市教育委員会 村上輝身、外崎理紗

研究メンバー：庄司知恵子(社会福祉学部)、槻ノ木沢拓孝(研究・地域連携室)、  
林雅秀(山形大学)、高橋正也(東北活性化研究センター)、長谷部弘(東北大学)、  
王慧子(同)、石沢真貴(秋田大学)、外崎理紗

技術キーワード：浄法寺漆器・漆室・3D・八幡平市

## ▼研究の概要

本研究の目的は、散逸の危機にある八幡平市石神地区の旧家・漆器問屋齋藤家文書を解読・分析するとともに、**県内で唯一の漆室**(うるしむろ)の**3D技術**による利活用を試み、漆器業関連文化遺産による地域振興の試みを進展させることにある。

## ▼研究の内容

調査対象(1)八幡平市石神集落の齋藤家文書(近世～昭和期の史料(大福帳、附合帳、戸長関係等の村方文書等)木箱10数箱分)、  
(2)同市岩屋集落の小山田家漆室(明治の初めに建てられた漆器を乾燥させるための漆室。昔は多くの漆室があったが、**現在県内にはこの1棟のみ現存**)。

⇒特に(2)について3Dデータへ変換、その分析と利活用の検討をおこなう。

写真1 岩屋漆室



写真2 室内部(画面右は風呂)

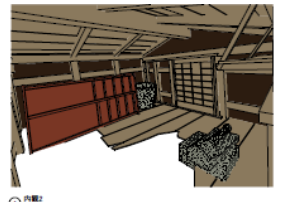


写真3(左) 蒔絵筆  
上から三本目が片切筆

結果1 3D  
データによる  
計測例



撮影:高橋勇介氏



計測:株式会社TOKU PCM

## ▼研究の成果

(1) 齋藤家文書から：①漆器業のみならず、馬産、その他の事業にもかかわっている、②時代状況を睨みながら、集落、地域も踏まえつつ、その時々が経営をおこなっている、③名子制度もそのなかでの役割をもっていた。

(2) 漆室について：3D画像化の例は結果1の通り。明らかになったことは、①現在はトタン屋根であるが、建てた当初は茅葺屋根であった。②土台は大工がつくり、土壁は所有者の曾祖父が塗った。③大きさは、棟高約280cm、梁行330cm、桁行300cm、室内天井の高さ150cm。④室の中にある風呂(漆器を入れて乾燥させる場所)の大きさは、間口170cm、高さ93cm、奥行73cm。風呂内部は2段で、楔止めの構造になっている。⑤土間に松の木の板を直に張っているのは、湿気を得るためであろう。⑥室に使用している木材は、杉・松・栗・欅。⑧非常に珍しい**蒔絵筆の片切筆**が発見されている(以上の成果報告会として2017年9月24日にシンポジウムを開催)。

## ▼おわりに

デジタル写真、3Dデータ化によって、現物が失われてもデータの**半永久的な保存・管理**が可能になり、多くの研究者の分析に供しうる。また、博物館等での展示等への活用も広がる。

県内で1棟(おそらくは東北地方でも1棟)となった漆室は、その希少性からも、また浄法寺漆器のブランド化を進めていくためにも、文書史料も含めて、現物の保存・利活用を考えていくのが望ましいのではないかと**漆器のみならず周辺史資料もセットでの文化遺産として位置づける**ことが可能となろう。